

報告 2

学生支援センター（ソーシャルワーカー）と 医務室（保健師）による学生寮の場を利用した ソーシャルワーク「寮飯会」の取り組みと実践活動 —「しばたサマーフェスティバル2019」での地域社会への発信—

佐藤 渉、清野いずみ、高加茂早苗、坪谷 融子

はじめに

敬和学園大学の学生支援センターは2015年に設置された。キャンパス・ソーシャルワーカー（以下、SW）1名が配置され、学生の悩み相談と、障害のある学生への支援の2本柱で学生生活の様々なサポートを行なっている。2015年以前は、医務室と、カウンセリングルームが個々に学生の支援をおこなっていたが、学生支援センター設置とともに、学生支援センターを中心に、カウンセリングルームと医務室の三部門が連携して学生をサポートする形が体系化された。学生の健康を支える医務室保健師、心理面の相談をするカウンセリングルームの臨床心理士と、相談や環境調整を行うSWの専門職が連携して支援を行っている。

本稿では、相談の中から出てきた学生のニーズに対し、支援室を飛び出し、学生寮で保健師とSWが連携して展開したソーシャルワークの実践「寮飯会」について報告する。

1. 「寮飯会」を実施することとなった経緯

本学の学生寮「ミント館」は、新発田駅前複合施設「イクネスしばた」の建物内に、2016年に作られた。新発田市の複合施設内に学生寮が設置された目的は、新発田市・建設会社・本学の産官学連携で、まちなかの活性化を図るため、学生もまちに入り込んで参加して欲しいというビジョンがあった。その目的を果たす為に、どのように寮生に意識付けをしていくかという点に関しては、学生寮の担当部署も試行錯誤している状態であった。

本学の寮は、食事の提供はないため、共同のキッチンスペースで自炊をするか、外で購入するか、大学が提携している弁当屋に申し込んで配達してもらうという食生活となっていた。料理ができない学生は、コンビニやお弁当などで日々の食事を摂ることとなる。

ひとりの学生が、寮生の野菜不足の食事を懸念し、学生支援センターに悩み相談として相談に来た。寮の体制整備は他部署が行っているもので、学生の意見を伝えることはできても、実際に学生支援センターが改善を施す権限はない。しかし、その学生が2回にわた

り訴えてきたニーズに対し、学生支援センターとしてなにか対応できることはないかと考えていた。そのような時に、学生の支援に関する研修会の中で目にした、岐阜大学の学生支援の取り組み事例¹⁾にヒントを得、学生寮で「食育」体験を通じて学生に意識づけすることができるのではないかと考えた。第1回目（2018年7月）は、学生の食育や健康の増進に関心が高く、料理が得意な保健師と共に、相談をしてきた学生と有志による、野菜たっぷりの手作りの食事を食べる「寮飯会～初めての寮飯～」を試行的に実施し、保健師2名、SW、教員3名と寮生7名の計13名が参加した。参加した学生からも、「またやりたい」という声があがり、また、当初困って相談にきたあの学生も、なんらかの道筋が見えたことを喜んでいて、この試行の会を経て、年数回であれば、保健師とSWで開催できると判断し、学生支援センターが寮で行うソーシャルワークという位置づけで「寮飯会」を定期開催することとなった。

2. 「寮飯会」の定期開催（2018年11月～2020年1月現在まで）

学生寮に関することを統括している寮運営委員会でも、「寮飯会」を寮で開催するイベントの位置づけとして了承され、年3回「寮飯会」を定期開催することとした。350円を参加者の実費負担とし、材料費の不足分に関しては、寮のイベントとして大学から補助を得る形とした。献立は、保健師が栄養バランスを考え作成し、材料費は一人あたり500円を超えない範囲で開催している（写真1）。開催前には、寮の担当学生と数回打ち合わせを行い、学生との協働で実施している（写真2）。



写真1 献立



写真2 みんなで料理をする

「寮飯会」は、あくまでもソーシャルワーク活動であるという観点から、その目的を「食育とつながり」とした。単に美味しいご飯を作りに来てくれる「給食のおばさん」にならないよう、最終的には、その取り組みから学生が食の大事さを学び、「食」という、誰でもが共有しやすい体験を通じて、身近な友人以外の様々な人とつながるきっかけとなれればと考えた。

これまで、4回の「寮飯会」を開催した。2018年11月には、寮が入っている建物のイクネスしばたの館長をはじめ職員の方7名と、地元の味噌醸造元である渋谷商店、寮以外の一人暮らしの学生、学生支援センターで関わっている学生なども参加した(写真3.4)。渋谷商店の専務・澁谷亮氏からは、味噌汁で実際使ったお味噌の製造についてミニ講座をして頂き、丁寧に作られた味噌の工程を感じながら食事を頂いた(写真5)。また、2019年2月には、地元の創業140年の老舗米屋である「米屋かたぎり」の飯田氏にお越し頂き、お米についてのミニレクチャーをして頂いた。実家が米農家である学生は、家で作ったお米がどのような人にどのような思いで販売されているかの流れを初めて知り、今まで知らなかった「つながり」を感じる事ができたようであった。

そして、なにより、温かくバランスの取れた食事を様々な人と大勢で頂くことは、体と心の両面で満足感を得、笑顔で元気になるということも参加した多くの人が実感した。また、イクネスしばた(行政)と渋谷商店(地元の企業)のつながりもできた。このような顔の見える「ゆるやかなつながり」が、学生寮内だけにとどまらず、地域ともゆるやかにつながっていくことを目指している。



写真3 食事風景



写真4 地域の方も参加



写真5 食のミニレクチャー

3. 「しばたサマーフェスティバル2019」での地域社会への発信

「地域学」スピンアウト事業として、「しばたサマーフェスティバル2019」に本学から7ブースが参加する初めての試みに、「寮飯会」としての参加のお誘いを受けた。チャレンジしてみようということになり、寮生より参加者を募ったところ、4年生1名、2年生2名、1年生5名の8名が集まった。保健師2名、SW1名の11名で当日に向けて準備をすることとした。実質開催日まで1カ月という限られた準備期間の中で、学年も学科もバラバラの学生と、ゼミ活動ではない学生支援センターとの協働に、果たしてちゃんと出店にたどり着けるのだろうかとか皆が不安を覚えながら、7月中の週2回、昼休みは毎週打ち合わせと準備をする時間とした。「寮飯会」としての出店の為、「食育とつながり」というコンセプトにこだわり、「カラフル野菜 with 味噌ディップ」を販売することとし、時間の関係上、イベントまでの準備計画や目標をSWと保健師で学生に大まかなルールを明示した。胡桃の身を殻から出したり、看板製作などの準備作業を学生が一緒にしたりす

る中で、徐々にチームとしての連帯感や、当日に向けて頑張ろうという気持ちが熟成されていった（写真6）。

「野菜マン」というキャラクターを作り、「野菜マンカード」を子ども達に配布することで、食育の発信も同時に行えるよう工夫した（写真7）。



写真6 準備風景

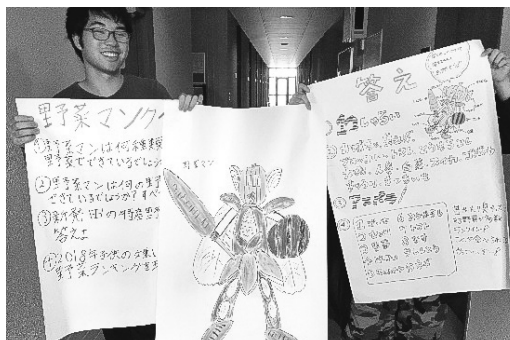


写真7 野菜マン

当日は、暑い中、長時間の作業であった。はじめは、呼び込みで大きな声を出すことに「恥ずかしいな」と言っていた学生も、そのうち、大きな声で呼び込みをした。どうやったら売れるだろうと各自が考え、ある学生は、自ら試食を持ってお客さんの方へ営業に行った。「野菜マンカードは、買った人にじゃなくて、子どもがいたらあげたらどうだろう」というアイデアが出たり、普段表に出ない学生が、他のどのブースよりも大きな声で呼び込みをした。「赤字を出さない」という目標に向かって、各自の得意なことを発揮しながら、閉店間際には、なんとか完売したいと（若干原価割れの値段であっても）値下げをし、完売させた時には全員で疲れも吹き飛んで喜んだ（写真8.9）。



写真8 出店風景



写真9 出店風景(夜)

売上利益 1,700 円は、学生達の希望により、お菓子を購入し、打ち上げ会にあてることとした。打ち上げ会では、サマーフェスティバルを振り返り感想をシェアした。「商品売り切った時に達成感を感じた」「また参加したい」「次回はもっと早い段階から準備を

進めたい」「職員と一緒にやることで学生だけでやるよりも経験の広がりがあった。寮で学年関わらず一緒に参加できて嬉しい」「引っ込み思案な自分が大きな声を出して、自分でも分からなかった自分がいた」「お客さん、地域の人とのつながりができた」「前から地域活動をしたと思っていたので、良いきっかけとなった」などの感想が出た。総じて、「大変だったけど楽しく充実した体験だった」という感想を共有した。利益を200円の現金でもらうより、分け合ったお菓子の味は格別であった。

まとめ

ソーシャルワークは、「人と状況（環境）の相互関連性」に着目し、環境調整を行う。ひとつのニーズから、学生の健康に関する専門家の保健師と、「寮飯会」、「しばたサマーフェスティバル」へと、フィールドワークへ展開し、学生との協働の中で、グループ・ダイナミクスによる学生の成長をみてとることができた。「寮飯会」を継続していく中で、学生達が自分たちの活動として参加する意識や、食を大事に思う意識も芽生えて来ている。学生達が活動のノウハウを体験を通じて学びながら、ゆくゆくは様々な活動に展開していき、ひいては、地域の中に飛び出していってくれることを期待している。

今の学生の主体性の出し方や表現の仕方は以前とは変わってきた部分があると思うが、学生に関わる大人が、学生の持っているものを上手に育てて、いろいろな方法やルールを明確に提示し、主体性の芽を伸ばしていくことが大切である。

今回、「しばたサマーフェスティバル」に参加することで、学生も大人も、一緒に作り上げる楽しさと充実感を味わった。この経験は、今後、学生達が様々な次のステップへ挑戦するための後押しになるものと確信している。

註

- 1) 岐阜大学保健管理センターで「いこまいセミナー」として開催されている、日常・学修・就活に役立つスキルアップや、交流を目的とした少人数制のグループプログラム。